

## 明治国家の情報収集と地方統治

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2009-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 落合, 弘樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/4176">http://hdl.handle.net/10291/4176</a>

## 明治国家の情報収集と地方統治

落 合 弘 樹

— *Abstract* —

## Intelligence and the district rule of the Meiji government

OCHIAI Hiroki

When an internal disturbance by samurais occurred in Saga in 1874, the Meiji government dispatched the armed forces immediately. A big trouble produces that I carried out such a strong step by the issue of Korea in the government in 1873 and it is big that it spread to a district and influences it. The government sent a bureaucrat of a high level to the whole country after a political change. As a result, a samurai was opposed to a government office intensely, and Saga understood a thing in a very dangerous state.

At the time of 1874, the telegraphic line was inaugurated from Tokyo to Nagasaki. It was a division of Kumamoto that was ordered by a suppression by the government. However, as for the telegram, the samurais knew information earlier from the armed forces of Kumamoto because it was delivered by Saga. The samurai of Saga demanded support from a samurai of Kagoshima. On the other hand, the neighboring prefectural governors had to gather information to them with oneself without understanding correct information because samurais of Saga intercepted information.

As for the first battle, a samurai of Saga won. However, Toshimichi Okubo of the Secretary of the Interior collected information positively and dispatched the armed forces of Tokyo and Osaka in Hakata with a steamship. The samurai of Saga was defeated, but I escaped to the district which was hard to arrive of information, and Shinpei Eto of a leader were arrested one month later. The government used information effectively, but there was the imperfect side. As a result of reflection for such a point, as for the intelligence and the fast transportation of supplies, wide cloth is improved in an internal disturbance of Satsuma generated in 1877.

## 〈個人研究第2種〉

# 明治国家の情報収集と地方統治

落合弘樹

## はじめに

この研究の目的は、明治政府が集権化政策を実施するにあたり、前提となるべき地方情勢の把握をどのように行い、収集した情報をどのように分析し、それらが政策形成においていかなる影響を及ぼしたかという構造について、明らかにすることである。明治前期における中央政局の推移や地方自治の形成などに関しては、渡辺隆喜『明治国家形成と地方自治』（吉川弘文館、2001年）にみるように重厚な研究蓄積が先学によってなされているが、地方の状況と中央政局の相関関係については、地方官の任免の推移を通じて政府の地方掌握を論じた大島美津子『明治国家と地域社会』（岩波書店、1994年）で綿密な分析がなされているものの、全体像については必ずしも十分な検証がなされるに至っていない。本研究は明治前期における中央政策と地方統治の関係について、政府の情報収集活動が政策形成におよぼした役割を中心に、立体的に捉えようとするものであるが、政府に集積された情報は膨大であるので、ここでは佐賀の乱を素材に情報収集と政策決定の連関を考察していきたい。

佐賀の乱は、参議として政権の中枢に立ったことのある人物が「首魁」となる士族反乱の嚆矢である。徴兵令施行以降に鎮台兵がはじめて本格的な実戦に動員された点も注目される。さらに、長州藩兵により鎮圧された長州藩脱隊騒動や、事前摘発だった久留米藩明四事件など、廃藩置県以前の反乱とは段階を異にしている。また、電信や汽船など最新の技術が駆使された点においても、戊辰戦争に比べて戦争の形態に変容がみられる。このように、佐賀の乱は多くの意味で画期をなす内乱だった。佐賀の乱に関しては、政治史的な視点にもとづく本格的な研究は少数の事例しか存在せず<sup>(1)</sup>、基礎的な部分からの検討を要するが、本章においては主として政府側の情報収集と情勢判断に注目しつつ分析を試みることにする。なお、本文中の注記のない引用は国立公文書館所蔵『公文録 明治七年 佐賀征討始末』による。

## 1 征韓論政変後の佐賀

佐賀の乱において、政府が鎮台兵動員という強硬な措置を迅速にくだした背景には、征韓論政変後の政情と、当時の佐賀県の置かれた状況が大きく関係している。ここでは、前提となる佐賀士族の動

向について概観し、あわせて政府が把握していた全国の士族の動向に関する情報にも触れていきたい。

征韓論政変は政治指導者の分裂をもたらし、西郷隆盛や板垣退助など討幕に貢献した軍事的リーダーが政府に対抗的な勢力を構築した。また、徴兵令で「常職」を失った旧藩士たちに征韓論というかたちで対外強硬論を喚起させ、さらに鹿児島や高知に呼応する動きが鶴岡や岡山など各地の旧藩士たちの間で形成された。一方、薩土近衛兵の一斉帰郷は、徴兵よりも廃藩以来の壯兵（士族志願兵）の比重が高い軍隊の動揺をもたらし、警察組織は未だ整備の途上にあつたので、大久保政権は岩倉と大久保を軸に政権基盤の強化に努めるとともに、国内状況の把握を図るために、積極的に情報収集を行っている<sup>(2)</sup>。

佐賀県は江藤新平・大隈重信・大木喬任・副島種臣らを筆頭に、藩閥の一角を占めており、地元に残った旧佐賀藩士の影響力も根強く、典型的な難治県の一つとして政府に認識されていた。廃藩当初は県庁の官吏も地元の出身者が高い比率を占めていたが、明治6年（1873）7月22日付で佐賀県権令に任命された岩村通俊（高知士）、さらに参事森長義（置賜士）のもとで、県庁機構の改革や人事異動、加地子問題への対応が図られるなど、徐々にではあるが集権化の方針が貫徹されつつあった。岩村は大蔵省を実質的に掌握していた参議大隈重信と密接に連携しながら施策を進めている。しかし、留守政府による急進改革は国内に多くの動揺をもたらした。とくに明治六年は未曾有の早魃に見舞われたこととあいまって、隣の福岡県では大規模な農民一揆が勃発し、岩村権令も農民への対応に忙殺されたが、結果的に士族対策を後手に回すこととなった<sup>(3)</sup>。

当時、佐賀ではのちに憂国党の中核を形成していく副島義高、木原隆忠、中川純義、村山長栄といった人物たちが欧化を基本とする開化政策に異論を強め、旧佐賀藩の海軍奉行で維新後は開拓判官・秋田県令・侍従を勤めた島義勇に依拠していた。当時、復古的要求を政府に執拗に迫り、蓄髪帯刀の士族を多数帯同して4月に上京した、島津久光に呼応する動きは熊本の学校党など広範にあり、副島や木原もこれに同調している。久光の運動が不首尾に終わったのちも木原・中川は滞京する一方、副島は宝琳院を拠点に同志を糾合した。大隈は彼らの存在を座視しがたいとし、一時は軍隊派遣を岩村権令に勧告している。

さらに6年10月23日の征韓論政変により参議江藤新平が下野したことは、彼の影響をうけていた中島鼎蔵、朝倉尚武、徳久幸次郎、村地正治、山中一郎、香月経五郎ら、在官あるいは留学経験をもつ少壯の旧佐賀藩士族たちを憤激させ、現政権への対抗意識を「有司専制」というかたちで一気に増進させた。彼らは12月23日に佐賀仲町の煙草屋で集会し、征韓党を立ち上げる。

征韓論政変後の不穏な情勢は佐賀にとどまらず、西郷隆盛や桐野利秋を迎えた鹿児島士族は割拠の態勢を固めており、鶴岡や鳥取、岡山の士族、さらには佐賀征韓党などから働きかけが試みられた。12月には鶴丸城への放火で熊本鎮台鹿児島分営が瓦解し、熊本の本営でも第十一大隊の兵士が暴動を試みるなど動揺が広がっていた。こうしたさなか、集権化を推進してきた岩村権令は12月17日に上京したまま帰県しなかった。このことは、佐賀士族に対する県庁の統制力をさらに低下させることとなる。

明治国家の情報収集と地方統治

征韓党は、明治7年（1874）1月16日に佐賀元町の小松屋で集会し、政府に「征韓先鋒」の出願を運動すること、拠点を確保するため「征韓先鋒請願事務所」として旧藩校弘道館の貸与を県に求めること、県庁機構の掌握という三つの方針を決定した。同夜、高木太郎らは森参事宅に押しかけて弘道館の貸与を強硬に迫り、却下されると森に暴言を吐いた末に弘道館を占拠したが、幹部の説得で「罵律」を犯した罪に服し、18日に訴訟課の糺問に復している。この騒動以後、森参事は征韓党幹部に対する依存度を強め、香月経五郎と村地正治が県官に就任したが、庶務課大属石井貞興とともに森を圧倒して県庁を掌握していく。

そうしたおり、征韓論政変後の実情把握を目的に中央から全国に送られた派出官員の一人である大蔵大丞林友幸が佐賀に到着した。林は1月17日に福岡県視察を終えて佐賀に向かうとの報告を東京に送っているの、早ければ弘道館借用をめぐる紛議が一応は決着した18日には佐賀に入っていたと思われる。佐賀の情勢を日撃した林は士族の沸騰を深刻に受け止め、強力な権令を派遣するように政府に要望している<sup>(4)</sup>。

貫属ノ景況、頗ル悪ムヘキノ風アリ。我士族ノ官ニアル勅奏任ノ者百ヲ以テ数ヘ、判任タル者枚拳ニ逞ス、朝廷政府ハ皆我藩人ノ維持スル処ナリト云フノ通言アリ。故ニ士族等、県官ヲ蔑視スル、最甚シク、或ハ参議ノ名称ヲ出シ、彼我是非ノ論ヲ発シ、遂ニ征韓ノ大事モ濫ニ建議スルニ至ル。実ニ王化ノ不治、此士族ヨリ甚キハナシ。故ニ此県ヲ治ンニハ有力方正ノ長官ヲ置キ、長ク此地ヲ去ラサシメメンヲ要ス。

さらに林は九州情勢全体の総論として、政府が先手を打つかたちで佐賀士族たちを鎮撫すべきだとする強硬な意見具中を行った。

佐賀県士族ノ如キ、空腹無心濫ニ高上ノ論ヲ立ト雖モ、敢テ意トスルニ足ラサルモノナリ。然レトモ今日ノ征韓論ニ至リテハ、隠ニ煽動スル者有力為ニ、益之ヲ主張スルモノト覚。必竟、此士族県下ニ有ルモノ、礼讓ヲ不知、上ヲ不敬、下ヲ不憐、漫ニ上ノ事ヲ誹議シ、喋々論ヲ立テ、県官ニ逆フヲ以テ榮トナシ、遂ニ是ヨリ征韓ノ論ヲ発ス。討不何ノ預知ル所ナランヤ。如此モノハ、往々県治ノ妨害不尠、今回ノ挙動ニヨリ、其論党悉ク之ヲ討伐シテ可ナリ。若此件不斷ニ属セハ、薩肥其他諸県ノ治否、大ニ関スルコトアルヘシ。薩ノ如キ暴論過激ノ魁タルモノ六七名、是又征韓台湾ノ論有ト雖モ、前件ノ裁決ニヨリ自ラ論滅スルニ至ン。然レトモ、此士族ハ議論実地ニ出ルアレハ、宜シク注意セスンハ有ヘカラス。

熊本鎮台司令長官の谷干城が佐賀県中属北代揆一から聞いたところによると、「林大蔵大丞該県巡廻、其事を聞き、差置き難きを以て県官に命じ律に擬し罪を断す」とあるので<sup>(5)</sup>、高木らの処分は林の指示によるのかもしれない。いずれにせよ、林の報告は政府首脳に強い衝撃を与えた。それがどの程度影響したかは不明であるが、強硬派でかねてより兄通俊に代わっての赴任を切望していた岩村高俊の佐賀県権令任命が、1月28日になされた。

ちなみに、佐賀の情勢を聞いて事態収拾のため1月14日に東京を発った江藤新平は、19日に嬉野温泉に到着し、25日まで佐賀に入るのを控えていたので、林大蔵大丞との接触はなかったと推測される。江藤は神戸まで鹿児島に向かう樺山資綱・海老原穆、さらには高知の林有造、会津出身の永岡久

茂、飢肥の小倉処平など密偵の監視対象となっていた不平士族と同行しており<sup>(6)</sup>、本意はどうあれ当局の警戒心を刺激したと思われる。

江藤が佐賀に入った25日以降、「俄然集会之勢ヒニ相運候」と、一気に征韓党の沸騰が高まった。また、「征韓」を根拠に武器を携帯する動きもみられたという。森参事は24日付で熊本鎮台の谷司令長官に、不穏な動きがあるので偵察のうえ対応策を講じてほしいと、谷と同郷の北代中属を派遣して要請した。これに対して谷は、「軽挙せば事を失せん」とし、「協和を主とし、暴挙を未発に消するを佳とす」と慎重かつ柔軟な対応を求めた<sup>(7)</sup>。また、部下の山川浩少佐に佐賀の偵察を命じ、「該地の形勢を見せしめ、江藤真に右様書生輩を煽動するや否やを探偵」させた<sup>(8)</sup>。

以上のような征韓党の動きとは別に、憂国党も活動を強めていく。1月12日に東京の島義勇邸で在京の島と木原、中川と佐賀から訪れた重松基吉ら幹部が会合して対応を協議し、これをもとに副島義高らは佐賀で「憂国社申合書」を作成した。彼らは「三条相国護衛団体ノ結社」として立ち上げ、元須古屋敷での会合での掲示は、組織の名義を征韓論政変後の不穏な情勢を根拠に、「鳳輦ヲ守護シ御私邸ヲ守護スル為ニ、有志ノ面々集会候」と、天皇と旧藩主鍋島直大の安全を掲げ、「武士之定職ナキハ大政府ノ御定ナレトモ、国家ノ為ニ忠奮義烈ヲ着目スルハ憂国忠士ノ本意タルベシ」と、政府の特権解体政策を是認しつつも強烈な国事参画の意識を示し、「征韓社モ亦タ憂国忠士ト知ルヘキ也」と、征韓党との歩み寄りを唱え、島津久光とも連絡を図っている<sup>(9)</sup>。

## 2 小野組出張所襲撃事件

佐賀の乱は、2月2日に佐賀県庁から東京出張所に発せられた次の一通の電報が大きな契機となる(電文のカタカナは漢字混じりに置き換えた。以下も同じ)。

佐賀県貫属、寺に集まり、征韓論を盛んに唱え、日々に勢い、昨夜小野組に迫り、手代残らず逃げ去りたり。

電信寮を所管する工部卿伊藤博文はいち早く情報を抑え、右の電文に「右は県庁より東京出張所へ電報するところの儘に御座候。尚、追々探索御届け申上候也」と添えて太政大臣三条実美に打電している<sup>(10)</sup>。

なお、同日付で福岡県から発せられた報告書は以下の通りである<sup>(11)</sup>。

佐賀県貫属以下農商ニ至ル迄征韓論主張シ、既ニ不日東京へ罷越候由ニテ、莫太ノ募金且昨夜小野組為替座ニ迫り、金員有高ヲ改メ、一錢モ動カスコト不相成出、数人詰番罷在、夫カ為支配人ヲ初メ手代共不残脱走、支配人某ハ当県へ今年後三時逃来り、是ハ恐怖ノ甚キ也。参事モ兵力ハナシ。只傍観ノ外致方無之形勢、県庁へモ他県人ハ辞表ヲ差出シ切り帰国、旧県人ハ半ハ同盟退庁掛ケハ寺院会議処へ罷出候体タラク、実ニ絶言語候有様。政府速ニ被降御手度、無左クハ不平士族ノ折柄蔓延可想像候。

小野組出張所襲撃事件については今日も判然としない部分が多いが、2月1日に小野組出張所に金談を迫ったのは征韓党ではなく憂国党だった。当時、華士族の家禄支給は現米が原則だったが、明治

### 明治国家の情報収集と地方統治

6年の旱魃により佐賀県も含めて多くの県が農民の石代納を認めた。それに対応して家禄も現金で支給されることとなったが、石代が納期を基準に算定されていたため、米価高騰下で著しく士族に不利となった。このため全国各地で旧藩士から現米支給が県庁に強く要請されていた。佐賀県では、年末に行うはずの家禄支給が2月にずれこみ、しかも政府に要請した士族の損失分の補填も拒絶されるという状況下で、ついに業を煮やした憂国党士族が「無理之金談」を行ったとも思われる<sup>62)</sup>。

ただし、征韓党は「征韓先鋒」の要求貫徹を趣旨に大挙上京して政府に圧力をかける計画を立てており、武器を携えた旧藩士が闊歩するなど不穏な雰囲気は城下に充満しており、小野組の店員は身に危険を覚えて逃亡したと思われる。征韓党に属する佐賀県権少属藤井伝八が2月4日に長崎県庁に伝えた情報によると、征韓党は「武器買入等モ有之、三十万円程相渡不申テハ難相成」として資金調達計画を立てていた。そして、小野組出張所襲撃のあおりで長崎銀行佐賀出張所も閉鎖されたので、本店と融資の交渉をするため藤井は長崎を訪れたという<sup>63)</sup>。当時、征韓党と憂国党は対立的だったので、憂国党が先手を打って資金を抑えた可能性もある。しかし、いずれにせよ鹿児島士族とも連絡のある佐賀士族が武器を集積し、大挙上京を企てているとの情報は官民に伝わっており、鎮撫の時期をうかがっていた政府は迅速に決断をくだし、2月4日に熊本鎮台に出動を指令した。佐賀の乱については大久保の峻厳な姿勢が強調されるが、対抗的存在だった木戸孝允も伊藤博文宛の書翰で次のように述べている<sup>64)</sup>。

佐賀県貫属実に苦々敷いま々々敷奴どもに御座候。元より無事平安は企望いたし候へども、如此ものどもには些日にも物見せ不申而は始終人民の安堵を妨げ申候。付而は少々無理からにも吐剂敷瀉剂敷用度ものと頻に愚考いたし申候。

ちなみに、小野組襲撃のあった2月1日に江藤新平は佐賀にいたが、廃藩前に彼が主導した藩政改革で世禄を剥奪された元足軽たちの中で襲撃が計画されているとの情報があり、墓参を理由に翌2日に長崎近郊の深堀へ急遽避難した。一方、騒動を起こした憂国党が首領と仰ぐ島義勇は、いまだに東京にいた。

### 3 熊本鎮台の動員

2月4日、熊本鎮台に対して以下の命令が電文で発せられた<sup>65)</sup>。

佐賀県士族動揺の趣、電報有之に付、其隊より出兵鎮圧致すべき旨、正院より御沙汰に付、臨機の計致すべし。尚、委細郵便にて申達候。

電報は翌5日に佐賀電信局に着信したが、いち早く佐賀士族に知れ渡り、態度を硬化させた。森参事は刺客襲来の風聞に狼狽して同夜逃亡し、佐賀県庁は石井大属ら征韓派が完全に掌握するところとなる。香月らは武庫司の保有する武器弾薬を抑えた。一方、島義勇は同じ5日に太政大臣三条実美から直接鎮撫を要請され、承諾している。

これに対し、熊本鎮台の谷司令長官は6日午後3時になって佐賀電信局から送達された電報を受け取る。東京・長崎間の電信線は前年に全通したが、熊本は経由していなかったため佐賀から配達され

た。谷は山川少佐がまだ帰着していないので、佐賀の詳細な状況を把握していなかった。熊本鎮台は前述した第十一大隊の混乱がようやく收拾したものの、足元の熊本土族に不穏な兆候がうかがえた。また、100名あまりの佐賀出身将兵も熊本に入った山田平蔵などから煽動を受けていた。佐賀士族は戊辰戦争従軍経験や技術者が豊富で、武器弾薬の備蓄や製造もなされ、鹿児島や熊本の士族とも気脈を通じていたので、谷は「リンキノ ハカラヒ」を求める拙速な命令に困惑する。さらに、重要命令を当の佐賀の電信局を経由して、平文の電報で送達した無神経さに、「彼を撃つを彼に托して報ず。如此にして兵を用、何ぞ成るあらん。兎輩と雖も猶其の疎漏を笑ふ」と憤慨し、「以後電報を以て右様の大事御報知無用」と東京に要望している<sup>69</sup>。とりあえず谷は連絡のために中村重遠中佐を東京に出張させることとし、7日には陸軍卿山県有朋に宛てて、即時出兵を不可能とする電報を打たせた。発信地は福岡だったため、東京着が9日になっている<sup>70</sup>。

佐賀県へ出兵致すべく仰せ付けられ候得共、只今は出ず。右に付き、中村中佐明八日上京す。

なお、政府宛の電報を一手に握っている伊藤工部卿は、10日に内務卿大久保利通へ、「谷干城書面之意ニ御座候、一ハ反復無疑と奉存候、左スレハ鎮兵向背不可凶、願クハ同人儀速ニ帰京被命、之ニ代ル將軍一名閣下御出張之節ニ御召連レ」と、谷を更迭して野津鎮雄か三浦梧楼と交代させるように要求しているが<sup>68</sup>、上記の電報を把握して、鎮圧出動に慎重な谷の出方を疑ったのだろう。大久保は九州出張に際し、総指揮の野津鎮雄少将、新任の広島鎮台司令長官に任命された井田讓少将のほか、山田顕義少将を伴っており、長州出身の将官を無任所で同行させることで、伊藤の意向に答えたと思われる。

政府は7日、近隣諸県への波及を防ぐために臨機処分を行うよう、熊本鎮台に重ねて命令する一方、岩村高俊権令に即刻任地へ出立するように命じた。岩村は佐賀に急行する島義勇と偶然に同船し、挑発的態度を示したため、島は一気に決起の方向に傾いたとされるが、ここでは詳細に触れない。

内務卿大久保利通は8日に「九州表之義、兼て人心動揺之際、此挙に由て如何波及仕候も難凶」と自ら鎮定にあたることを三条太政大臣に要請し<sup>69</sup>、翌9日に九州出張を命じられた。大阪鎮台の歩兵二個大隊と東京鎮台第三砲隊の派兵も決定される。10日には、「凶徒犯罪判然タル上ハ、捕縛処刑ノ儀ハ勿論臨機兵力ヲ以テ鎮圧ノ事」と諸権限を臨機に全面委任した書面が大久保に手交された。

動揺は各方面に飛び火したが、征韓党が確保した佐賀県庁からの連絡は途絶し、政府からの連絡も断片的だったので、福岡・長崎・白川・三潴・小倉・山口などの各県はそれぞれ密偵を派遣し、独自に情報収集を試みた。たとえば白川県権令安岡良亮は、2月7日に大久保内務卿に次のような報告を行っている<sup>70</sup>。

本年一月下旬頃ヨリ佐賀県貫属士族共諸所ニ屯集シ、兵器糧食等相募リ物議騒擾ナル赴相聞へ、事実為探索官員指出置有之候。尤右勢当県貫属ヘモ内々相響候景況略相見ヘ候得共、未タ為差儀モ無之、勿論未発ニ相防候様専ラ心配仕居候。乍併不容易形勢ニ付、不取敢右之段御届仕置候也。

同じ7日、山口県権令中野梧一のもとにも密偵の桂讓助から「佐賀県ヨリ両県エ波及シ、士族党ヲ結、朝政之不立ヲ論シ上京セシ者モアリ。甚騒然タル模様」が伝えられている<sup>70</sup>。

また、長崎県が発した密偵村崎甚之助は、鎮圧命令が下された後の佐賀の状況を見聞し、2月14

明治国家の情報収集と地方統治

日に参事兵頭正懿に以下の報告を行っている<sup>24</sup>。

本月三日佐賀到着、景況日撃スルニ三派ノ勢ハ大ニ精銳、且派論不同ト雖モ、深ク之ヲ推セハ結局一轍ニ帰センカト被察候。因テ私探索滞留中其動静見聞スル処、貫属ハ勿論市街等モ騷擾、且其兵器運搬ノモノ翻々、已ニ暴挙ノ勢ニ有之、從テ隣県ヨリノ探索人不少、事情切迫ニ相見候処、江藤等之ヲ憂、有志輩論シテ云、国家大事ヲ凶ル、必ス輕忽ニ出ツ可ラス。沈着熟慮始尾ヲ全センヲ要ストノ云々ニ因リ、前日県庁在ハ銀行等エ暴行ノモノ自ラ其罪ヲ訴シ、昨今景状大ニ沈着ニ属シ、且副島ノ一報モ有之哉之趣、右之旨ヲ傍察スルニ、征韓ノ議ハ最早関東筋並四国辺モ盛ニ沸騰ノ模様ヲ察シ、政府ニ於テモ必ス天下一般ノ形勢ヲ可被案ニ付、一篇ノ書ヲ具上セハ貫徹スヘキトノ意見ナラン乎。

沸騰の様子はあるものの、江藤新平の帰県後は一定の統制が効いており、香月を代表に政府に建白を行う方向でとりあえず平静を保っているとする。その背景には、西郷も久光も積極的支援を行わないだろうとする情報が、鹿児島入りした山中一郎と副島義高からもたらされたことも影響していた。しかしながら、「今般新権令入県鎮台出張セハ、斯ノ機変如何可相移哉想像被致候」と、岩村権令と鎮台兵の入県で情勢が急変する可能性も示唆している。兵頭参事は右の情報をただちに政府に転送し、あわせて党派的中立を標榜する前山誠一郎らの動向について、「征韓愛国両隊万ニ暴挙有之時ハ、鎮台兵ヲ不供夫々鎮圧可致旨申唱」てはいるものの、「一時之詐謀」の疑いもあるとし、「旁以迅速嚴重之御処置有之度不堪希望」と一刻も早い鎮撫を要望している。

鹿児島には佐賀士族からの働きかけが盛んになされていたが、鹿児島県権令大山綱良は2月16日に大久保に宛てて、「佐賀等ヨリ段々入込諸方エ面会之儀相募候得共、誰も手指之人無之」と報告し<sup>25</sup>、さらに前日に佐賀県の旧蓮池藩士族高嶋彦四郎と和田泰一を尋問した中属今藤宏の報告書を同封している。二名は佐賀の様子について「征韓之挙ニ付テハ先ツ大衆上京之上、朝廷奸吏ノ罪ヲ数テ是ヲ放逐シ、封建ヲ復シテ形勢ヲ強クシ、四民ノ分ヲ嚴ニシ、能ク内国ノ基ヲ立ツベキノ趣意ニテ、密ニ器械彈薬ヲ備へ候山」と語り、支藩の立場として傍観できず、鹿児島動きを見たいうで去就を決めるため派遣されたと述べたので、今藤は「県下一般右様之者無之」と答え、「万一此より内乱を醸出シ候ては甚不可然」と説諭したという。大山は、大久保に「種々奸謀を廻らし、鹿児島を手先エ仕ひ候気味ト相見得候、期日折柄甚時害相成儘ニ而、速ニ御潰シ相成候方乍恐至当と奉存候」と、鹿児島士族を統制するうえでも迅速な佐賀の鎮撫が必要だとしている。

#### 4 岩村高俊権令の入県

2月7日に東京を出立した岩村高俊新権令は、13日に熊本鎮台へ来着した。この日、江藤も長崎から佐賀に戻り、征韓党は「決戦の議」を起草して抗戦の決意を固めている。谷司令長官は大阪・東京からの2大隊1砲隊の増援を待ったうえで鎮圧に着手しようとしていたが、岩村からの直接の強い要請を受け、第十一大隊を二手に分け、海陸から佐賀に兵力を送ることとした。

翌14日、山川浩少佐に率いられた将兵332名からなる左半大隊は、岩村権令とともに熊本城の本営

を出発し、翌15日深夜に佐賀城に入った。一方、陸路を進んだ佐久間左間太少佐の右半大隊316名は15日に三池（大牟田市）まで進んでいるが、強行軍で多くの兵が靴ずれを起こし、また弾薬類は海路の左半大隊に託していたので、戦力が低下していた<sup>29</sup>。

なお、大久保内務卿はこの日、権大判事河野敏謙、大検事岸良兼良、山田顕義少将、工部省四等出仕岩村通俊、内務少丞武井守正、開拓少判官西村貞陽ら属僚を伴い、開拓使保有の北海丸で午後5時に横浜を出港している。地元士族に対応するため、佐賀出身の外務少輔山口尚芳のほか、大村出身の大蔵大丞渡辺清、熊本出身の侍従米田虎雄も同行していた。

鎮台兵の接近とともに佐賀城下は一気に緊迫の度を強めた。15日夜、佐賀電信局は東京の電信寮に次のような電文を送っている<sup>30</sup>。

今夕、熊本鎮台二小隊程、間道より当県へ入込、就きては川上へ出張の属の内より鎮台へ応接の次第により、同夜にも大事件にも及ぶべきかも計り難く風聞、此段御届申上候。

さらに続いて、鎮台兵と佐賀士族の衝突寸前の佐賀の様子を生々しく伝える電文が重ねて発せられた。

士族動揺、穏やかな模様の処、鎮台兵蒸気にて三重津へ着、且福岡より出兵の様子にて、俄に十三日より東は轟、北は川上、南は早津江まで出張。寺院は十三日より今日までも十人或いは五人位づつ出張致候故、分明ならず。当地市中、何れも荷物片付け、婦女子は逃げ仕度にて大騒動なり。此段御届申上候。

以降、電報は佐賀から発せられず、吏員の逃亡か断線で電信局は閉鎖されたと思われる。

佐賀に入城した鎮台兵は、県官が離散したために食糧が確保できず、大砲も欠いていた。15日夜からすでに斥候同士の小競り合いがみられたが、佐賀兵は筑後川に防衛線を固めて右半大隊の合流を阻止する一方、夜陰に乗じて城を包囲し、16日未明より砲撃を開始した。包囲戦は三日にわたったが、左半大隊は兵力が劣るうえ食糧・弾薬も欠乏し、18日になって右半大隊との合流を期して筑後川方面に脱出することとし、三隊に分かれて城門から突出した。山川少佐と岩村権令を含む本隊は夕刻に久留米にたどり着いたが、部隊の41パーセントにあたる137名が戦死するという大打撃を蒙った。

鎮台と佐賀兵の間で戦端が開かれたとの第一報は、16日午後10時5分に福岡県権参事山根秀介が内務省と大蔵省に発した「クマモトチンダイト サカカンゾクト サクヤハンヨリ ヘイタンヲヒラキタリ」との電文で東京に届いている。さらに17日午後4時には山根から福岡県令立木兼善宛てに以下の電報が発せられた。

佐賀県国境に兵を配り、道塞がり、確報なし。一六日も砲声激しき由。大尉和田勇馬、岩村権令戦死の説あり。未だ実不知れず。確報を得て届くべし。当県にて三大隊の銃器弾薬を用意せり。追って入費大蔵省へ申出づべし。事済む後は難し。伺置頼む。

ちなみに、岩村権令も和田大尉も生還しており、不正確な情報である。佐賀から意図的に流された誤報の可能性もある。また、司法省一四等出仕山本守時は2月19日に島津久光に送った報告書で、「実地見聞之為」16日午後2時に佐賀に到着し、「遂ニ三之丸、三之丸は同十七日比ニ落城ニ相成り、鎮台兵過半火煙ニ堪ス滅亡ニ至候趣ニ御座候由、残兵は未タ本丸江籠城有之候得共、兵糧運ひ等一切無

### 明治国家の情報収集と地方統治

之、最早右兵糧攻と申ニ至候趣ニ御座候、但県下拳而皆兵とナル勢也」とし、「右は見聞之俣申上候」と断っているが、これもかなりの誇張が含まれている<sup>87</sup>。いずれにせよ熊本鎮台の苦戦は、情報不足も手伝って近隣の県官たちを震撼させた。ちなみに、政府は17日に新聞に対して軍事関係の記事掲載を禁じ、混乱が東京などに波及しないよう対策を講じている。

熊本県の庶務課は18日に三支庁に宛てて次のような通達を送り、県内の動揺を抑えるように指示した<sup>88</sup>。

〔前略〕 不容易事件ニ付、当鎮台ハ素ヨリ県下ニ於テモ取締向ハ嚴重取斗有之候。就テハ熊本市中モ少々動揺いたし、逃仕度等有之候へ共、右ハ全ク事情解シ得サル処ヨリ区々ノ街説ニ惑ヒ候事ニ付、是又各戸長共より夫々及説諭候事ニ候。

同じ18日の午前11時に、小倉県権令小幡高政は大蔵省に発した長文の電報の中で以下のように伝えた。

即今の模様にては、内務卿の大隊の他に、三大隊並びに軍艦御繰り出し相成らずては、鎮定に至る間敷、当県貫属数あれども器械足らず。二大隊分ばかり至急御送り下されたらば、ひとかどの御用に立つべし。

実際の戦闘は、熊本鎮台と大阪鎮台の二個大隊、東京鎮台第三砲隊が主力となり、さらに広島鎮台の第十五大隊と海兵二個小隊も戦闘に参加しているので、小幡の見積もりは過剰ではない。また、福岡・小倉・長崎各県の士族も貫属隊として動員されることとなる。武器も佐賀兵はアームストロング砲や七連発式スペンサー銃を所持しており、前装式エンヒール銃を多数含んでいた熊本鎮台兵より装備が上質だったのは事実である。ただし、狼狽ぶりもうかがえる文面といえよう。なお、「熊本本営は甚々無人手薄」と評された熊本鎮台の谷少将も18日に報告書を山県陸軍卿に送っており、佐賀の左半大隊が苦戦に陥っている模様だが詳細は不明で、筑後府中（久留米市御井）に移った右半大隊と本営は連絡が維持されているものの、佐賀兵が筑後川を渡り柳川に屯集しているとの風説もあるので、砲隊で県内を固めていると伝えている。そして、「賊軍ハ日々ニ増加シ、台兵ハ孤軍遠外之景況、実ニ難堪候得共、日夜野津少将到着渴望罷在候」と胸中を吐露している<sup>89</sup>。

なお、14日に横浜を発った大久保内務卿は16日に神戸に着いたが、開戦の情報に接し、谷が来援を渴望する野津鎮雄少将指揮の大阪鎮台兵とともに、翌17日に直ちに安治川口を出港した。このことは、緒戦の勝利に沸く佐賀士族はもちろん、九州各県の県庁も熊本鎮台も、成り行きをうかがっていた近県の士族も把握していない。

## 5 戦闘の展開

2月19日は重要な日となった。まず、太政官布告第二十三号により佐賀征討が宣せられ、佐賀兵は「賊徒」とされた。

次に、佐賀の鎮台兵と岩村権令の消息が、福岡県権参事山根秀介による内務省宛午前11時5分発信の電報で政府に届いている<sup>90</sup>。

佐賀県庁並びに郭内、大半焼ける。権令、鎮台兵とも本丸にありしが、昨一八日午前十時頃、暴徒の囲みを脱し、午後二時三藩に着す。これより先、熊本本営の兵、筑後府中に留まり進みえず。因てこれに合す東京の兵、未だ着かず。佐賀シツヒの兵強し。当県用意の器械乏しく、且熊本鎮台約を違う。故に大阪鎮台にしばしば器械を請ふ。取り合わず。願わくは政府各鎮台に地方官の求めに応じ候沙汰ありたし。

兵器の貸与をめぐり、鎮台と地方官の間に齟齬をきたしている様子がかがえるが、当時の地方官としては、一般徴兵を含む鎮台兵より、地元の召募士族の方が動かしやすく信頼性も高かったと思われる。もっとも、熊本鎮台も「二月十八九日より二十一日の頃、熊本の市郭鼎の沸くが如く、朱髯結髪の士族累々隊を為し、蟻の穴より出づるが如し」という状況に直面しており<sup>69</sup>、再編中の第十一大隊への補給も必要で、大阪鎮台もまた2個大隊を出動させており、武器を主戦場以外の県に提供する余裕はなかったであろう。

さらに、この日の正午に大久保内務卿と野津少将が博多に入港した。そして、翌20日には将兵1,364名からなる征討軍が集結した。野津と幕僚は直ちに作戦会議を開き、午後6時には野津の指揮のもとで全軍が行動を開始し、21日未明には対馬藩の飛び地だった佐賀県の田代（鳥栖市）に到着した。

鳥栖近郊に位置する朝日山は、筑後平野を一望するとともに長崎街道を抑える拠点で、元陸軍中尉西義質と山田平蔵の指揮する佐賀・唐津・小城・蓮池の士族が拠点を構えていたが、22日払暁に野津少将は田代から轟（鳥栖市轟木）に軍を進めて攻撃を開始した。双方とも砲兵を含んでおり、参謀局編『佐賀征討戦記』が「賊力ヲ極メテ四面猛撃、官軍殆ト挫折セントス」と記す激戦の末に、横合いから奇襲を受けた佐賀兵は撤退した。政府軍はただちに追撃して切通で再度激戦となり、一部の部隊は苔野（三田川町）まで前進したが、兵力をまとめてなかばる中原に宿営した。朝夕二度の勝利で士気は大いに上がったという。大久保内務卿は日記に「愉快の一左右不堪欣悦」と記しており、午後5時55分に陸軍省宛ての次のような電文を発している。

今朝七時頃より、轟にて戦争始む。官軍大勝利、賊諸所え放火して退く。愉快の勝利にて、兵卒勇氣凜々、少しも懸念なし。明日頃には佐賀を乗り入るべし。

熊本鎮台兵の敗報が近隣各県の県官を動揺させ、各地の不平士族に不穏な動きが見られるなかで、勝報を得た大久保の喜びぶりが伝わる。適切な指揮があれば鎮台兵は十分に士族兵に対抗できることが明示された。なお、大久保は明日にも佐賀を陥落させるとの意気込みだったが、戦いはこの先まだ一週間続く。

佐賀兵は中原の宿营地にたびたび夜襲をかけたが、翌23日も激戦となった。寒水川を越えて長崎街道を西進する政府軍に対し、佐賀兵は丘陵や檀田など地形を活かして果敢に抵抗した。江藤新平は増援の兵を率いてJR長崎本線吉野ヶ里公園駅付近の田手川に阻止線を構え、応急防御を試みた。しかし、迂回攻撃を受けて突破され、佐賀兵は神埼に後退したが、平野部に進出した政府軍の追撃は激しく、支えきれずに境原に退却する。一方、政府軍も神埼が焼失したため苔野に下がって宿営した。軍事的にはこの23日の戦闘が事実上の決戦だったとされる<sup>69</sup>。戦況が絶望的だと判断した江藤は、この夜のうちに側近を引き連れて佐賀を離れ、鹿児島に向かっている。また、島義勇は抗戦の構えを崩さ

## 明治国家の情報収集と地方統治

なかったが、久光に休戦の仲介を依頼するため重松基吉と中川義純を鹿児島に送った。

24日から26日まで三日間、本道の政府軍主力は苔野に駐屯し、佐賀郊外の姉や境原（千代田町）付近まで発した斥候兵以外は休養させている。24日に大久保は陣中見舞いのため苔野を訪れて野津らを慰労し、今後の作戦を協議している。また、近隣各県からの県官の訪問が相次いだ。大久保は25日に次のような電報を東京に向けて打っている。

昨日戦い休む。今日攻撃、賊格別戦はず、追々退く。籠城の覚悟と見ゆ。道筋橋を落とす。賊の隊長、鍋島市之丞を、一昨日討ち取る。最早策も尽き、力も尽きたる模様。

有明海を南下した江藤らは、25日に米ノ津（鹿児島県出水市）に上陸した。江藤らの遁走は24日には政府側に察知されており、25日に白川県権令安岡良亮は管内の戸長に次のような布達を發した<sup>64</sup>。

今度佐賀県下動揺ニ付テハ賊徒党与之者共入込候哉モ難計、就テハ糧米塩噌其他日用之物品売渡候儀不相成段、本月第五十九号ヲ以テ布達置候処、右之外海川大小船ニ無限貸渡候等之儀モ決テ不相成、自然賊徒関係之者ト見受候ハ、取糺之上最寄之士民申合取押へ置、其段急速可訴出。

尤巨魁之者捕獲候者へハ重キ御賞義可被下候趣。若乍存隠置後日相顯ル、ニ於テハ嚴重処置可及候条、此旨更ニ布達候事。

27日は、午前6時に苔野から進撃した政府軍と佐賀兵が、姉村や川久保、蓮池などで終日激戦を展開した。28日になると佐賀兵の組織的な行動は見られなくなり、副島義高と木原隆忠が境原本營の参謀渡辺少佐に、村山長義が長崎口から諫早や大村の士族を随伴して嘉瀬まで進出していた海兵隊の遠武秘書官に休戦を申し入れたが、謝罪降伏以外の書面は受理できないとしていずれも拒絶された。渡辺は木原を捕虜にして、明日10時を期限に総攻撃をすると最後通告をする。旧幕臣で五稜郭の戦いを経験している中野山口県権令は、この措置を三日後に耳にして「此際ニ至り嘴を入ルハ、武門ノ情を不知といふべし」と木原に同情的だった<sup>65</sup>。一方、海兵隊は午後六時を回答期限としていたが、返答が来ないのでそのまま進軍し、佐賀城を無抵抗で占領した。島義勇らは佐賀市街が兵火にかかるのを避けるため城外に退去していたが、協議のうえ住ノ江港から脱出している。大久保のもとには、重松基吉と中川義純の嘆願をうけて島津久光が使者として發した中山中左衛門と和田八之進が、鹿児島から訪れている。大久保の日記には「今日、久光公使ニテ中山和田入来、応答、河野中判事同席」<sup>66</sup>とのみ期されているが、寛大な処置を求める久光の要望を大久保は拒絶したという。ただ、相手側の嘆願を却下して結果的には島たちを逃亡に追い込んだことに対し、長崎出張中の大検事岸良兼養は大久保に「御進撃ノ際降伏当を得ず巨魁皆遁逃ノ由、実ニ奇怪之至可惡之甚敷事ニ奉存候」と批判的に述べた<sup>67</sup>。

蓮池本營の政府軍は3月1日に行動を開始して入城した。大久保はただちに江藤・島の搜索を指示している。翌日には電信線が回復され、大久保から正院に「サカケンヘイテイ サンガツイチヂツ ニユジヨウセリ」と、戦闘終結を伝える電文が打たれる。

## 6 鎮定後

佐賀士族が城を放棄して逃走したことに對し、2日の午後に佐賀からの情報を植木駅で受け取った谷少將は、「賊何処ニ去ルカ更ニ不相知段申聞候。最モ一旦降伏ヲ以テ官軍ヲ欺キ、其間各器械ヲ携へ、分散之事ト被相考候得共、何分其情実更ニ不相知」と困惑している<sup>69</sup>。3月4日には安岡白川県権令から戸長に、江藤の人相書きとともに類似者の捕縛が命じられた。なお、大蔵大丞渡辺清は出身地大村や諫早など長崎県士族を指揮して長崎を警備していたが、熊本土族に不穏な動きがあるとの情報で熊本出張を命じられ、佐賀士族との合流を協議した住江甚兵衛らを8日に調査している<sup>69</sup>。佐賀からの逃亡者が熊本に潜伏した可能性もあったが、熊本土族に同情的な態度や捜索への消極性が見られたのか、安岡権令は9日に次のように士族を説諭した<sup>69</sup>。

佐賀県逆徒征討ノ儀ニ付テハ向々内務卿ヨリ被相達候旨趣モ有之処、頃日来脱賊多クハ当県管内ニ逃込之間ヘモ有之ニ付、尚以嚴重之布達致置候処、今以其實功ヲ見ス、遺憾之至ニ候。抑彼ノ逆徒ノ如キハ共ニ天ヲ不戴ノ国賊ニ候得ハ、苟モ此ノ土ニ生ルモノ自他ノ別ナク一同力ヲ協セ、臣子ノ名分ヲ擴張シ、人民之義務ヲ尽シ、搜索捕獲以テ邦家ノ鴻恩ニ奉報候様可致、右ハ今更申迄モ無之儀ニ候得共、尚又及布達候事。

住江たちは4月25日に「遠足留」が免じられているので、江藤・島らの処断が完了するまで監視下に置かれたのであろう。

大久保内務卿の指揮で江藤・島の追跡は厳重に行われ、属僚を各県に派出させている。また、国外逃亡もありうるとして、内務省五等出仕北代正臣と統計寮七等出仕川北俊弼は上海と香港にまで送られている<sup>69</sup>。江藤らの逃避行と裁判については諸書に譲ることとする。

### おわりに

3月27日に田村昌宗が大隈重信に送った書翰は次のように述べている<sup>69</sup>。

柳川久留米モ前山隊ヲ拒ミ賊ヘ兵糧ヲ送ルノ勢、大概合一ノ形勢ナリ。若官軍發向両三日ヲ延サバ、九島固結不可解之勢、是ヲ討容易ナラス。或ハ大形勢ニ関スルモ亦難計。抑官軍發向ハ二月十九日ト内決有之居候処、同月十七日熊鎮兵籠城之云々電報ニ付、俄ニ同日より出發之事ニナレリ。此ノ兩日引揚ケルト引延ストノ間、豈天下ノ大事ナラズヤ。電機之大有益アル、真感心ス。

佐賀での鎮台兵の敗走は熊本土族の沸騰をもたらし、佐賀士族が当てにした鹿児島士族の呼応も桐野利秋などは前向きで、肥薩同時挙兵の可能性もあり、九州のみならず高知や岡山、山口、鶴岡などに飛び火する可能性もあった。しかしながら、汽船を使用した政府軍の迅速な展開により阻止される。ただ、政府の佐賀県に対する情勢判断は、谷干城が批判するように拙速の面があり、電報による鎮圧命令も佐賀士族が先に入手するという矛盾をもたらし、電信線の経路から離れた地区と東京の通信は時間的ずれを生み、江藤に一ヶ月近い逃亡を許すとともに、短文の文面という電報の制約か

## 明治国家の情報収集と地方統治

ら、中央と現場に行き違いをもたらす場合もあった。なお、一般に対する情報開示は、政府が新聞社に軍事関係記事の掲載を制限したので、公表された政府宛電報による情報の範囲を越えていない。

政府は、佐賀は征韓論政変後における沸騰の火種とする林友幸の情報を重視し、軍隊や警察の組織が万全とはいえない状況のもとで、佐賀の鎮撫を決意したが、一步を誤れば田村が述べるように政権崩壊の危険性もあった。西南戦争以上に政府の直面した危機は大きかった。佐賀士族には弁明が許されず、江藤の処刑も迅速かつ冷酷に実施されたが、長引くことで江藤たちへの寛典論が生じ、あるいは政府批判が再燃する事態を回避する意図があったと思われる。

佐賀の乱の教訓をもとに、西南戦争においては、電信や汽船の活用、暗号の使用、密偵の派遣、交通・通信の封鎖、報道統制はより整備されたものとなり、情報はさらに高度に利用されることとなる。

※本研究の骨子は拙稿「佐賀の乱と情報」(佐々木克編『明治維新期の政治文化』, 思文閣出版, 2005年9月) および拙著『西郷隆盛と士族』(吉川弘文館, 2005年10月) に反映させた。

## 註

- (1) 堤啓次郎「明治初期における地方支配の形成と士族反乱」(長野暹編『「佐賀の役」と地域社会』, 九州大学出版会, 1987年) など。
- (2) 拙稿『明治国家と士族』(吉川弘文館, 2001年)。
- (3) 前掲, 堤啓次郎「明治初期における地方支配の形成と士族反乱」。
- (4) 林友幸「九州巡回報告」(国立公文書館所蔵『明治六年地方順廻報知書類』)。
- (5) 『谷干城遺稿 三』(東京大学出版会, 1970年) 395頁。
- (6) 的野半介『江藤南白 下』(南白顕彰会, 1914年) 414～415頁。
- (7) 『谷干城遺稿 三』, 388頁, 395頁。
- (8) 同右, 396頁。
- (9) 『江藤南白 下』428～429頁および、『鹿児島県史料 玉里島津家史料七』(鹿児島県, 1998年) 323～324頁。
- (10) 工部卿として伊藤博文が積極的に情報管理を行ったことは、石井寛治『情報・通信の社会史』(有斐閣, 1994年) で指摘されている。
- (11) 神宮文庫所蔵「三条実美関係文書」(東大史料編纂所写真帳) 324。
- (12) 前掲, 堤啓次郎「明治初期における地方支配の形成と士族反乱」。
- (13) 早稲田大学社会科学研究所編『大隈文書 第一巻』(早稲田大学, 1958年) 92～93頁。
- (14) 『伊藤博文関係文書 四』(塙書房, 1976年) 233頁。
- (15) 防衛研究所図書館所蔵『明治七年二月乃三月 軍事日記 陸軍第一局』(陸軍省雑M7-6, 157)。以下、『軍事日記 陸軍第一局』と略記。
- (16) 『谷干城遺稿 三』394頁。なお、大島明子『「士族反乱期」の正院と陸軍』(藤村道生編『日本近代史の再検討』南窓社, 1993年) は、佐賀の乱当時の軍部が、正院が軍政に介入する権限を得た明治6年5月の太政官潤飾後における政軍間の構造的対立と、鎮台に残存する士族志願兵が反乱軍に転化する危険性に直面していたと指摘している。
- (17) 『軍事日記 陸軍第一局』。
- (18) 立教大学日本史研究室編『大久保利通関係文書 二』(吉川弘文館, 1966年) 114頁。
- (19) 『大久保利通文書 五』(日本史籍協会編, 1928年) 348頁。
- (20) 熊本県立図書館所蔵「熊本県政資料『事変佐賀』」(モコア27-8)。以下、熊本県政資料『事変佐賀』と

## 略記。

- (21) 田村貞雄編『初代山口県令中野梧一日記』（マツノ書房、1995年）217頁。
- (22) 神宮文庫所蔵「三条実美関係文書」（東大史料編纂所写真帳）326。
- (23) 『大久保利通関係文書 二』、190頁。
- (24) 『谷干城遺稿 三』、399頁。
- (25) 『軍事日記 陸軍第一局』。
- (26) 『鹿児島県史料 玉里高津家史料七』330～331頁。
- (27) 熊本県政資料『事変佐賀』
- (28) 『軍事日記 陸軍第一局』。
- (29) 同右。
- (30) 『谷干城遺稿 三』、401頁。
- (31) 九州地区補給処中田二佐編『佐賀の乱（役）』（佐賀県立図書館蔵）125頁。
- (32) 熊本県政資料『事変佐賀』。
- (33) 『初代山口県令中野梧一日記』、251頁。
- (34) 『大久保利通関係文書 二』、359頁。
- (35) 熊本県政資料『事変佐賀』。
- (36) 『大隈重信関係文書 二』（日本史籍協会、1933年）270頁。
- (37) 熊本県政資料『事変佐賀』。
- (38) 国立公文書館所蔵『佐賀県暴動事件書類 三』（2 A 33-9単1167）。
- (39) 国会図書館憲政資料室所蔵『三条家文書』58-11
- (40) 『大隈重信関係文書 二』、280頁。

（おちあい・ひろき 文学部助教授）